

九、街頭録音



←実際の街頭録音の様子

きのう午後、駅のそばで街頭録音があったので、敬一さんと見に行った。小さなあき地に、人が二、三百人集まっていた。となりのビル二階に録音する機械がすえつけてある。ここでは録音するだけでなく、発言する人の声が、集まっている人たちによくきこえるようなくふうがしてある。

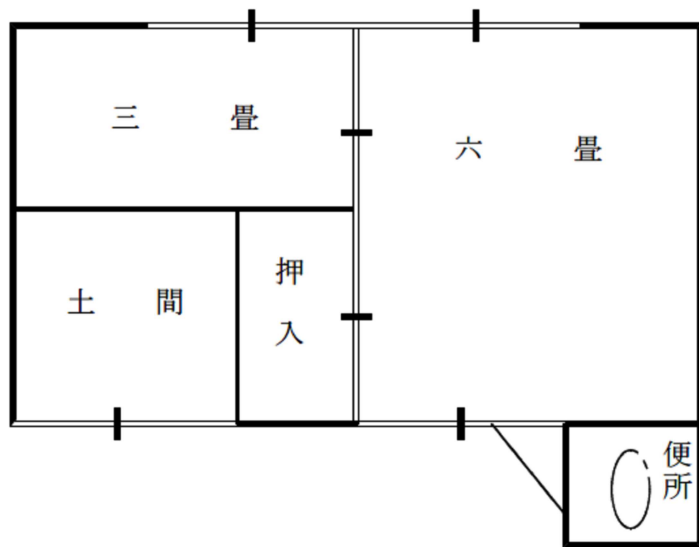
あき地には、スピーカーが四つ五つあって、話している人の姿は見えなくても、声はよくきこえる。あき地のまんなか低台があって、その上に、放送局の人が三人立っていた。黒い野球ぼうをかぶり、街頭録音班という腕章をつけている。そのなかのひとりが、長いコードのついたマイクロフォンを、話す人の口のそばにあてがい、アナウンサーが話を進めている。

ぼくたちがいったときは、もうはじまっていたので、人のうしろの方になってしまっていて、話している人の顔がみえなかった。だんだん人をおしわけてなかにはいっていってみると、話したいという人が、台のちかくにならんでいた。集まった人たちの意見に対して、政府の考え方や、仕事を説明するために、戦災復興院の人もみえている。この人はなかおれをかぶり、レインコートをきていて、少しふとってはいるが、やさしい声の人だった。気がついてみると、集まっている人たちは、老人も若い人も、男も女もあり、服装もさまざまだが、大学生がたくさんいた。

また敬一さんのような中学の生徒もかなりいた。小学生は、ふ

たりばかりへいの上にのぼってんでいるのがいただけだった。

はじめ、家をたてるにはどうしたらよいか、ということを中心に、おもいおもいの意見が出た。資金をどうするか、資材をどうするか、土地をどうするか、というようなことが問題になった。家の焼けない人から、税金をとったらどうか、という人もあり、家は焼けなくても、商売のなりたたない人もあると、それに反対する人もあり、三角くじや宝くじのように、家のあたるくじをつくったらどうか、というえかきらしい人の話もあった。家は、あたらないけれど、その家をつくる資金のあたるくじは、都道府県で実施してもよいことになっていると、復興院の人が答えた。



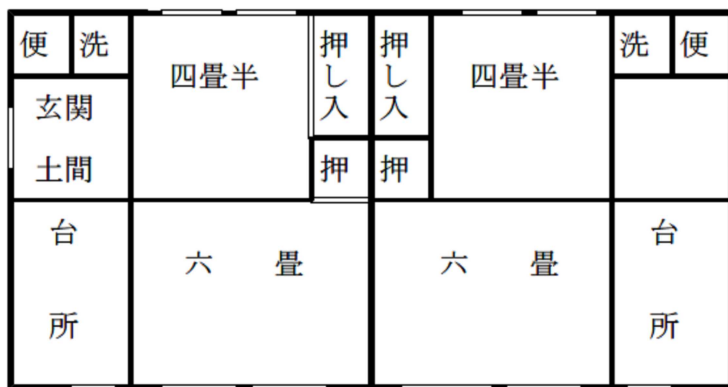
應急簡易住宅

しかし、結局は、政府の手で安くてよい住宅、ことにアパート式の共同住宅をたててほしいという希望や、大邸宅やあいている建物をもっと開放するのがよい、という意見が強かった。長いひげのおじいさんが、木や竹を少し使って、土で家をつくったらよいのだといったが、少しこっけいなおじさんで、きいている人はおとぎ話しのようだ、と笑った。ぼくは、おじいさんの考えを研究してみたかどうかと思った。

次には、貸間についての意見をいうように、アナウンサーがたのんだ。中年のおばさんが、まえに政府が大住宅の開放を強く要求したとき、それではといって貸してくれた家主が、このごろ政府があまりやかましくいわないので、へやを貸しておくのがいやになって、理由をつけて追い立てているのだと、話しそうに話した。若い男の人が、大きな住宅やあいている事務所などを使えば、もっと貸間ができるといった。

元気のよいおばさんが、私は家主のほうですがといて、アパートっていくのもなかなかたいへんだということや、しかし、貸す人も借りる人も、困ることや苦しいことをお互いにうちあけていけば、おいたてたりすることはないと話した。

アナウンサーが、おばさんのところでは、どのぐらいのへや代ですかときいたら、四畳半で二〇円、六畳で三〇円です、と答え



戦災復興院設計の国民住宅 1戸当たり 36 m²

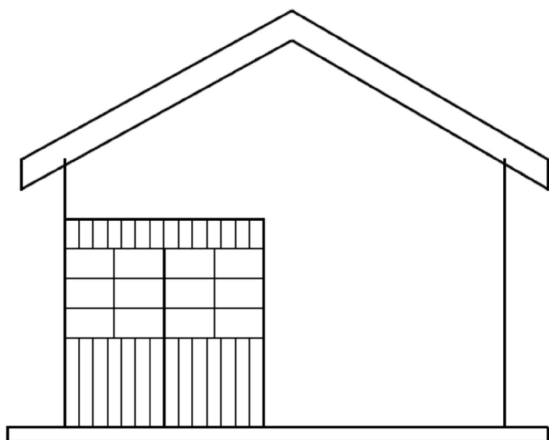
た。
だれかが、なるほど安いと感心していた。話は自然にまえにもどって、住宅をたてることや、貸間をつくることになったが、そのうち復興院の人に、ひとりあたりどのくらいの廣さを目標にして家をつくるかという質問がでたところ。おとなひとり二畳半から

三畳であると説明された。

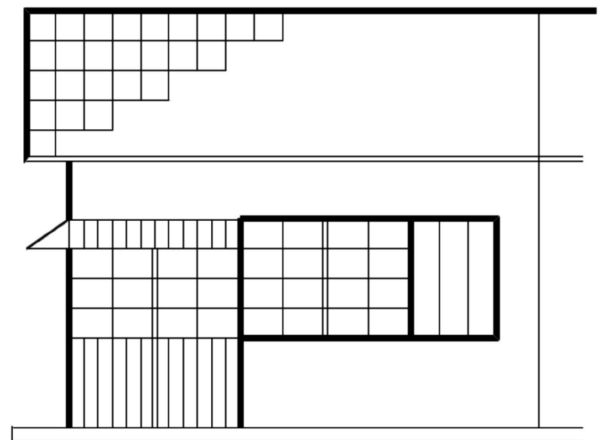
たとえば、現在わが國の一家族を平均五名とみつもっても、六畳、四畳半に台所押入などをつけたものくらいのざいりょうもせつやくでき、住みごこちもよいという家やコンクリートなどのもえないアパートを、多くたてようとしているということであつた。

ぼくは、あまりそまつな家ばかりたてて、あとで困らないかと考えた。時間がなくなっていくにつれて、アナウンサーは、だいぶいそぎはじめた。話す人もなるべく同じことをいわないようにし、きいている人も、「だっせん、だっせん、」とか「かんたん、かんたん」とかいて、なるべくたくさんの人たちからちがった意見をきこうとしていた。

西面図



南面図



資材の輸送に努力せよという人や、政府の計画を確実に実行してもらいたいとい人などがあつた。

街頭録音は、ただおもしろいからやるのではなく、たいせつな

ことがらについて、できるだけいろいろな人の意見をきいて、みんなの生活をよくしていくためのものだから、じょうずに話をする必要があることがわかった。

さいごに責任者から、貿易が再開されても、ほかに輸入しなければならない物資がたくさんあるので、住宅をたてることは、決して容易にはならないということを、統制に反して建築することが、政府の計画を実施する場合大きな障害であるということの説明があり、アナウンサーのお礼のあいさつがあつて録音がおわった。きいていた人たちもみな拍手して解散した。

解散後も、二、三〇人の人が、復興院の人やアナウンサーをとりまいて、質問をしたり、意見をいったり、たのみごとをしたりしていた。放送局の人がマイクや拡声器をとりかたづけても、やはりその人たちは熱心で帰らなかった。

ぼくは、放送局の人に、この録音は、いつ放送されるかときいてみた。係の人はわざわざほかの人にききあわせて、たぶん来週の木曜の夜になるはずです、と教えてくれた。敬一さんは、中央の台のそばにあった大きなスピーカーみたいなものが、何をするものか、ときいた。これは集音機といって、きき手の笑い声や拍手など、その場のありさまを示す音をおさめるものであった。

敬一さんの話では、放送局の人たちは、きょう録音したものを、うまくへんしゅうして、放送するのだそうだ。

街頭録音の放送をきいていると、すぐその場所から放送しているような感じがするが、係の人はさぞ苦心することだろう。家に帰ってから、年鑑で住宅難のことをしらべてみたら、厚生省では、次のような推定をしていると書いてあった。

戦災でなくなった住宅は、被害建物二四六万戸のうち、二一〇万戸、強制疎開でなくなったものは、取りこわし建物六一万戸のうち、五五万戸、両方を合わせると、二六五万戸で、戦前のわが國の住宅総数をだいたい一四〇〇万戸とすれば、戦争による減少だけを考えても、現在は一三三万戸で、戦前の八〇パーセントしかない。また、都市だけをとってみると、戦前六〇〇万戸が、現在は三三五万戸になり、五六パーセントしか残っていないことになる。

このほか、引きあげてきた人たちのために六七万戸、今後一〇ヶ年間に、世帯が増加するために入用になるものが一〇万戸、戦争中、建設をあわせたために必要になっているもの一一八万戸、今後一〇ヶ年間に使用が不可能になるもの一〇万戸（風水害によるもの四万戸、火災によるもの一万戸、自然にくさってしまうもの五万戸）があつて、住宅難をいよいよひどくしている。

これに対して戦災死等のために需要の減少する分は、三〇万戸にすぎないそうである。このことをしらべてみたり、ひとりあたりの住宅の廣さをきたりすると、ぼくたちの家が、満員電車になっているのもあたりまえのような気がした。